



○ 150 cm
10
SEKISUI JUSHI
12

612
シ
4



續世綱第一

とくらま第一

一 雪井

子日

のりま

やわら

二 三

の妻

このみがま

四

とくらさんや中井二

マの下りあひけ

立 よみがへり

ほきせゑ

六 るまづ

とくらのゆ

白川の花ひ萬

鳥羽ゆかえ

八 まめく

魚のいわ

とくらの下井二

れ たとこふ

りのね

十 あがくわわ

四妻

十一 まくよのす

えまだれ

十二 おとづれ

十三 おとづれ

十四 おとづれ

十三 さくら

じよせん

十五 すみのまわり

十六 雪のこ

十七 いすみ

くらとめ

まのまゆ

をうてのひづ

うちのら段

ゆうきの中井立

十八 ひのき

くまのつゆ

ちのまゆ

十九 いぬくら

けいあくせ

うのこう

二十 花のふ

くまの

ゆうきの花のふ

田代

ぬらりのあさ

廿二 ああせひす

人のあさ

ゆのね

うる

ささ きくみのけ

せき いきだよ

さか たうとうわ

せ

やまや

そめく

さと うね

うきうのなうき

ゆのうひら

さか あわせ

あだとうふ

ゆまく

しりのまく

みえきわ

三原氏やとす

花のあすえちねこ
ゆめあらわ

世一

月のこよ山鶴

世二

しのきわ

いづみ

ゆとのみら

じにわら

かうわ

なはり

けうわくのけふ

ヤムの十日あまうればたゞへる
はくをあらひまつてくせす田
てゆはてまくねくまくさく
えんとヤムのふりうだい日う
トうみかくしてりとあひきこづ
あらうてやまとじてしまがわく
そりうせのえよくまくううわ
みたくみわくわくとくてもく
ひくをくらうてその、やくにくろ
くとくをくらう

まくはりすみとてのわきとまのうれ
おこよひくすれむとくさうやをひる
寺二年よりとへあ應永年よりと
ちきいりをあまううちの春秋より
とせそりやとれりんせとくわまう
うつむかへせじとくわえびと
れす万秀武年小とく成とやたま
みほ一系のゆくせとくわせじゆが
年たゞ一月 こうい万秀二年のたゞ
とうりの春秋のうちやん補天皇

もう半代よわせにうなづく

雲井

後一系の仰門の者の一系流の者ニ付く
よれりすすむ上東の門中ま敷すと
之入道並ち故ち道長の不との第一の
立じたる御門宣弘立年十一月の
十日立すりひそひの日ひましらを経て
日本六十月十六日立す朝の直旨來
えりを経て同年六月十三日立す
角せ給はるるに付すと云院
くわゆりを経てけどこの事無從考

よた立す角せりゆつりやうを経て
之を立する事無より角せぬまづ
み之を立す角すと云すと云ふと
せりりとくわを経て長和立年じくまわ
れりよくわを経て仰門のゆつりやうを経て
立すれどそれ立すからず立す
み之を立すのあらゆると云てゆりを
経て立すと云ひやうと仰門から入れ
とた大にとてゆきの門の用ゆたり
申、乞まはせぬまづてつまづの

之月よりはすくはれりあらとまへえ
せ行ひ小ゆりやひと行ひまゝの日や
うてぬるをなはせぬまえ行ふま
も八月九日あまりゆけまわとのをひ
まこと無むもう月よりうちひと行立
月よりれひと行ひゆゑせゆら
にくなりすやひやまひなとさ
こえてくらりせ行ひきがたとのれ
の者この就まどあつまもんてよさ
せぬそ大立りゆき行ひてまよだ

まことえひと行ひ小一奈地とアシヒの
けうそくわりとのくままでせ行ゆ過
せなまきとえ行ひりまうのせゆるに
かのうのなとくみゆくうゆくれりのく
まふ行うきとこゆくみとアシヒす見
仁二年七月よりのうとひ十小ぢをせ
かたうゆすりうりうりもとま
けつてたなふきせぬまうとま
もうくとくとくとくとくと牛の

まことにぬりう節月の女八日とむち
やつづりててよせ終るね
のくなゆるみれをとく
ありりよてよくあめりく
代のくすりにわらき行ひ
をアラシとあへく
モリモリふかびのえうもえ
らのくしだて涼ひよきそく
りうわやとせきくとくとく
てじうわにわす入るれ
のでのくしへのくわのくとまえ行
しのうせゆまくわくわくわ
よれりよす神之月の十日
わくまくまくせくよ國母とくわ
もあねねくわくわくせくよ國母とくわ
三日からくわくわく一女二日よ上東口
みゆくわくわくわくわくわくわく
のね色とあくわくわくわくわくわく
こくわくわくわくわくわくわく

こうん八月廿八日車を仰え賤せひとあま
西ノリ十一月廿九日申れ月十九日
入道村東なるかくらのむじらと経
日で年めえから三月廿二日かき量すばつ
うり出らとゆくとあせらともまよま
ほまみとえりけいせきせきと仰あま
さぬとくちをわづらふぬふそくま
りうこたたうとアラムのアラム
十月三日入道のたまひえよのりくと経て
恵ひくとゆういまQとじりとゆく

治安二年三月廿九日七月廿四日は成事小
行をせらを行ひ入道村金堂供養せ
らを経て、うひまえとおひととあらりと
され行けいせらをゆひとあらりと
もみがゆひとあらりとあらりと年五月
よを車を后まよ朝親の行をせらを
えまきあらとねりやう。りひとせきあら
ひりうすりとゆふありのとあらりと
えりとれまのうりとく一十月廿二日
ふ上東門院のふくあらひとまとの六十

の湯堂せりを珍らしかつましの
やううりよとくきこの中よどがうせりと
ゆううんこれうゆうとえ万葉元年九月
十九日(癸酉)とひま湯池よりまありて
へじよぐんせりをひづまくをと美后
もうち日ふまく井りをもみてそゆ
ゆくとくせ珍りうくてせ一日小ちまく
ゆくとくせ珍りま湯池の珍りまのあれ
けくとく井りまくせうしゆくとく中
つりのまくゆる源氏ノ中将と入られ

之の如きを以て其の事に付する所の如き
位中わく其事は元治二年八月吉日奉
の事也と不嫌子即ち三歳の頃より始
て五日これらを経て入道式の如き
みよたすうじいの申よひと申く
トモトモと申すふと申とは於此處
をもとと申す事と申すが如く申すやん
と申すたゞ申すも不思の御ひらひ
といふ事と申す事と申す事と申す事と
らはるかにわざわざ申す事と申す事と

乃のあくのうめいにとくも
へき

二日

ことせの五月十九日を是處より出立
へりと終るよりその御みとくわゆ
てよおつたとくはくかくまくみ
えらきりあよひくせとのきりを
ゆうそくをとくもとくもとくえりとくはく
大本店とどとひ選手内祝とくとくとく
がくこのうすとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

三みづのうちに入り

ひそりやなれやこまくさん

この山の先に村との宿舎まである
てまつらせぬるをもとへておこゑゆけ
いりとなくたゞみ入る風ふかをもよら
ぬせむと毎月うへゆるがんとす
えらを経て那處うへゆるせむだまち
舊の御とあうえゆくへ、あくまゆ
うやうへせらを経てしむにあゆた
くわらわへくわだひきくはく
をくわくわへくわだひきくはく

トナリニテアエハクミアキヤハ
後參泉流のまほと二重流とアシテ
トウキアヌムツムクムセ行きりと見
ごとの年とてうりて

モトニテアエハクミアキヤハ
トウキアヌムツムクムセ行きりと見
ごとの年とてうりて



なまのやまとひのとみゆきにさりた
てうたはるよしむらのよしむら
のうのうのうとももとのえやな
くをうとうあやうふまつのう
は
かくた石うてゆうりてなうろ
ういをてねうわなとまくまくま
もすうんううりうも月とへぐりう
たれひすくううらせゆうひのう
ふくやうは仰るうき人の

すれども行かせて貰ふ事は成
まつた。ゆきはさうすまよひをあつて
まつまつとせまつまつと走り出でた。
まつまつとえびりとあくびとおびけさせ
て走り出しまふ四東まつた。まつた
やまのたまゆふづきて、まづらぐの
うてぬまし。まづらぐやめんそ
とのて日入道き。れどだまひなま
くもうまとてまのうせらひたま

うのうへとひねりゆく

又日見ゆる事あつたるを

えりて

うつのへふみずちうきと
おひでねまくらやかさん

たすき年やうしの十日うちが
くらのさよとえひとせまくら
くよ月とくらのくわくせまくら
のくわくせまくらはくとくわく
くわくたのくしまくらしきれけりき
津まくらのくまくらのくわく

行ひてあくらひきと大年あくらせ
おもむのせんりくとくらとくらとくら
又おこぬとあくらみくらとくらとくら
東とくらゆづとくらせ行ひぬくらは
のくらとくらとくらとくらとくらとくら
たくらとくらとくらとくらとくらとくら
またくらとくらとくらとくらとくらとくら
のくらとくらとくらとくらとくらとくら

同天記取葩稀色

分野望看露冷光

どう人のうらわゆらえもんへたく
角りつゝや菩提樹院よみゆ門の山の
れりへゆきとお取の手、ももうけり

よふてうつとあせん雲井み

あすく月のうらと

の菩提樹院二条院のゆゑにたまきと
くらのあまうみらのひるとのすうし
とうじてそなめえくせなまひり
ゆくべしむくやまくすうもとを

うなづくを仰

うゑ

後藤薦院とすりての二条院の才之
のまゆの上東の虎さんひとたか 印旛
ふたりぬすこの印門寛弘六年つうで
のうりとPしその高月のせ立ひよひよ
きひとひと七年五月十六日お祝ひと
こえよせ終寛弘元年八月九日玄文よも
じあまくわくのとよいえりと終矣

もえれ年六月十二日よりやよつせ終帰
ノオハモシヨウシキサト大嘗命行と
てヨリモリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
たのたとととととととととととととととと
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた
申事高にてうへせ終忌との仰あつた

一のゆゑよなにぬきまくま
もらふまくまくまくまくまくまくまく
まらまくまくまくまくまくまくまくまく
こみくこのみくこのみくこのみくこのみ
のゆゑたつるおりゆゑとおけそりせ
おううううううううううううううう
うううううううううううううううう
おううううううううううううううう
おううううううううううううううう

もよしてのうよゆるにせきんや
うとうとあきえ行つておれひの
みのゆのゆりてみだくとれらを行い
よひきのせとくじまく感業寺まくする
かくくらはりのりとくの門のとくわ
つまびてのまよれりてかくひりよふ
やうりおきくらふくわくわくわくけ
はと・のたすとくのゆくわくわく
くくううたまよおちまくしながう
らまかくはりくじまくせゆよ

内侍の御用事の如きは、御内侍の御事より
一歩とされば、さう立派の御内侍の御湯
明門院と申す。この御内侍の御湯は、
内侍の御用事の如きを、御内侍の御湯と申す
内侍の御用事の如きを、御内侍の御湯と申す
内侍の御用事の如きを、御内侍の御湯と申す
内侍の御用事の如きを、御内侍の御湯と申す
内侍の御用事の如きを、御内侍の御湯と申す

あやかしむるにあらぬのねとたえて
ひづかにじらはぬとてあれ

とくちよきんせんのいはきよきよをまよ
たれゆのはのやまとうぢりこ
ええれよとくわいたのまみくわびひて
内侍のくとくこえは、お泉のゆ
のあまよたりゆくみまくもとく
てうせ行へ、このまほまほとく
こくのゆのゆくじくまのじふぢ
をとくゆを行へるゆくまうゆけりだ
え行へと、延暦元年六月の日、官内
殿の御湯院よりあつたまくせらでござ

ありてまことに此の御内閣は
さてどうもうかぬるに御内閣一日上東院
朝覲の事ゆゑと申す事無く御内閣
この處の事と申す事無くあらじ御内閣
よもよもと御内閣の事かとせの事と
と申してまづり御内閣を先帝
これりと申す事と申してたゞ
まつ一代の國母とアモウヒトと申す事
まつ朝覲の行儀と申す事とセガツの
みゆみゆりと申す事と申す事と
ト
アラルハヤシの事と一員を申す事
キタキタヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
ミテシテシテシテシテシテシテシテシテ
アリリリリリリリリリリリリリリリ
アラミタヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテ
アラミタヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテ

中止シテシテシテシテシテシテシテシテ

アラミタヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ

シテシテシテシテシテシテシテシテシテ

アラミタヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ

もくも月の半日。たれのまくら
かよそりとてつまゆ。月一日
女御^{めご}、おもてせひてよもんと
おたがやゆうゆうとね。母はの
みゆきのあみ長曆^{ながつ}年、月
十九日ふとおまむりひてたすこ
廿八日よしやひくにそ一木とあるゆ
ありとたづるうきうきと秋の夕
ときしておまちを月のすといとくま
あじうらゆの病れもとまわすま

うもとまきまわらひとうとゆ
きよひのまきすて見えらとおちる御月
もとれまきゆりとくよりてみ
せゆまもと佛まわらとくのゑ
風のまえをねりそりがたうすまうり
くさな井もあらひのあとこのま
くさとくにまゆゆかきもぢ
ふきもあれせらまくも下
のてりそ因もとせらりとせらる
南殿もと井もとく官養たとわ
る
るは一糸流中まよひりうひよ
うみよ行伊吹かわりく
ううううううううううう
さるよまき秋のうれと
とよかき秋のまうりき林をひと
ももつよとあもてだひとれ
りとあふとえ行うのと
て日圓りあらうむらやで
る
三のまくわりかわひぬう

路非山水誰堪跡
迹任乾坤豈得尋

なとづくせ絶けうとうとあまうし
う乾坤とつたあらうとふとくもる
長久二年二月二日花室せりとてうゑ
のえくとじゆふうまととひたま
むくうとくもゆきとありとせえひりま
けみのうひやうひのう所れたちたに
くはまよちまとアレ小也即ちく

うり経本うちれたりします先
のゆきたりやあらわだらけつす
ソラテキ御りま神が月のうきやま
敵肉を食とまえ経二のまみ肉経の
小なりもてとうたまひて
くやふたり一月三日御
りうてホア大師もくらへおえ
セ也ほ者也とア文をア
うりてく人を称また尚被とされ
仰仰たるうさ年四月三日行

奉言時緑圓緑中とよのくをせらを
ぬましめゆとよのくをつくりてあく
モア緑りゆとくをもあらへとせを
のくらよもくわゆのこりたのく
きんあもくわゆのくをもくでせのく
くとよきわゆのくをもく人くくえ
あもくわゆのくをもくをもくのく
善國ゆきのとひみさり民部憲主
行たなづくのくをもくをもくのく
のみくわゆのくをもくをもくのく

まよひだく魚をもとめかねば

九月

うとおひのけふ四のうす
ゆきこのよしのまくわせ
とこのつりてふやゆくしにとよた
のゆきは一束後半産院うちて
きくもとえりせせりつらとみて
は一束ゆくとてゆきせせりしセ夜の
あよひよ尺よみづらうてゆきせり

乃ちまほくらを仰げりのつ
いわゆるあゆまく

うちたまことせいか

たわえむらも花は十じうきゆ
みにりゆき一糸ぬくれりと竹の
後一糸のみにそよれりゆきよ

たて一のまくわせまくひけき

まくわ

立幕のうわしをわすめ敵と人ま
ソリてひまか伊魂太輔

もやく山のまくわすめ

まくわすめあせむとくす
えりとけさは一糸のくとくす
せむく寛仁二年正月よだまくら
たまくらがまくら年正月十九日小出さ

まくらを経ておれゆゑい清淨堂と
すまうから来たゆゑとめりを以て女房
とまつてえらを経てよひまくら
もまうせぬまつてはりやうようへ
まくらをまう長暦二年五月七日ふく
一たろさせりあさりの入道中納言
せとすくわとそめがうまこと
れにまひまひりりき
まくらを経ておれゆゑい清淨堂と

かくらうてひかへこむる
きうちあてまんたびひまく人風と
なむすとまくわんやうひれむ信
のうくとくのゆゑよひくわく
おきんとくまきかはりむ一れづ
きまくわりひくふくとくわく
もくらうきよゆせまわらひ
かじらとくわえてみまかだの後の
西朝とらねのゆゑはあらひ
ういせきくわらうとくらうとの

まくわくまくわくすねのひ花のと
ふとわくまくわくまくわくなん見え
九月十ニ夜より一月のけまで佛
のゆゑもえりくまきほりけ会
くわくわくわくまくわくめんよ人ま
くわくわくわくまくわくまくわく
の朗詠くわくわくまくわくまくわく
文信の兵部マクモウラムモウラ
モモモモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモ

往りまん林もとすむらせのへりあつて
はよりそよごとくひりまのせをも
いま人でつらうむすびとくとくも
りくの殿と人そよむすびわざみ
る念ねむりそよごとくとくこの業
つらうむすびとくとくの業と
Pアタリ、みだらけの女郎の院モ
のぬえ、ええとくう陽明つもこのゑ
あらうたまくみどりよじうてつせあま
う郁芳門待貢門なまへかく升の見

からくらはづく湯のゆをひらひるひる
あらそとそ養とひらひるひ一束二束下
トうとあらそとひるひるひるひるひるひる
そハセマテナリ申

のえん

このうえでひるひる後冷泉院とアモ後末
薙流の寺のまゆゆねぬけのうみ賀宣
を后文姫とおもて入道ありとわ
の才たれじとひりよ志門院のうみ
ひるひるひるひるひるひるひるひるひる

秀二年三月のとひのとひのとひ
きひをもまくら長慶元年七月一日元服
やつてこふの位めまつせ終八月十七日
東宮よりてかく寛建二年正月十六日く
らわふりと行ぬひすオーフたりまし
も承和元年やうひのあつまちをめく
もくめくらをもくらセ月十日中まくせ行
ひきあまみひとくらもとこあくと
たけ申後一茶院のをうまひりお
る月ととくらとくらとくらとくらとくら

とせりと行正月十六日とお月とてた
みちうどす十月と開ひと申た
とくのたれとせゆとてうだま
大ニホカと申、とひうねたま
マ年十一月と敵上の手合せりとたまし
ましのゆうれんえと院とらのらの
けくやうかとやうくたう申
トふくと被因は仰のつておのれとま
とあくと一書の手よとみゆうみる
のすうりのすうりてひきもあうたの

川入とまわりきとてとくとてのと
いとてはうと立年とひす開ひ敵
のゆじまうせけよまくらむまくアホの
えとアーレとすと六年二月十日と
りあふとめり経と后のまこととくと
まくとくとくとくとくとくとくとくと
と月立日敵とのひやうがりせりと行
まくとくとくとくとくとくとくとくと
とれまのうとくとくとくとくとくとくと

りみゆのれと連絡殿上人の手
引まじくとて即ちふたう
うきうちとてなほをありおつ
りふくと九月九日之のえせに
て薦むきまわるまことよ
めとけらをあまびとまこと
一七年秋を月のうへとみとてた
くもあまひゆくとけらを経ひまこと
えけらのけあまひつねのう
なぐ

こゝのみがま

うきみゆふくとん九月十之夜
す湯院のうきうよたりはゆけりう
ゆくのうきうよくとてつまのみ
か月やうてゆくせらをもくし
くゆとゆひ

いはまうりたうくみやひきと
うきう月のうきとてのうり
うきうえゆりし後曆元年九月十五
りふく湯院かこのうりのゆのゆ

見ゆるにせぬまへて八種
をこなすせるまじきの見る
ものあつてなくせずもまた
たゞ一のけ道す仰ひ勝花庄主
のまへ僧都たとえられまくる
とえまくの間もひて
福祥のとひがりむる村との事と
みてまくらううらむまくらう
りうううくはやくまくらうう
まくらう一か夷のりもやくんもうち

人を殺し川にて、この
うも作りきりとて、やまと
は人にいはり作みるへりまほ
のうよかとせりやくまでととの
うゆうとくのねりよくとて、けちの
わざとくに、おもむくのむとを
あんじぬまつりれらきりた六日みづ
せせくふあうよとせせめて、モロミ
をそげらせぬまくまのめいのみの
製

忽看鳥瑟之明影
暫駐鷺輿一日遊

とやけらせゆうとりのふかひえゆう
ゆあひくわくとせゆきしりひとくそ
ゆくはくとくゆく人アリそのゆいそ
准之言の宣旨もすば厥アシタマとゆく
とえこえりとゆくあらうやうう
きん肉裏アヒトミとワニキリけ泣せりとゆ
えりんぬらうのとくまみぬらをあくま
たま樂人全殿よ人乍まアハマてかみの見

りの日せひもむき中よたまのあわく
の申納云と云ふ事はいはれどもまみ
胡飲酒もいはゆるやうて云ふ事
まへる事から背筋にだらせたと
ももて赤し絆ひうちだらけのれと
そそくえ絆ひもじゆまいへお改
のむくとよきんとておまか十二月廿二
社よりてくもむきとらせ行くみとがる
やまゆりてつゝの十二月一日鉢をま
ふうの廢朝してみととおう一世のうつ

くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
仁和寺のやうて僧徳よなり神方を
牛車でくもくとくもくとくもくとくもく
おこゑへ行うべく月と云ふ事
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく
くもくとくもくとくもくとくもくとくもく

七
九
九
九

けつての内と後、ふるえにだつて申し
まへ親王またアリ、はうのとく後
朱雀院さんとのアリスカウトセ
シテ、しつての十日ばかりのこうくる

乃せぬるにのまゆうりゆき
まよとひゆてまくのゆせたまよと
くらむれどもこころつりと徳徳大
をくらむれどもかほとのやまと仰れの
くらむれどもかたせーと仰前。
まよりてうきとうきの仰ふつきそ
アラシヒタカニオニエルを経けり。
坊主もくじてあきらめにいだん
圓白のまえひとくふとくの
らふとくわざれりとくわせ

おまくすひうぢまくじてくわ
くわたましひきとくわとくわえ
まえいゆせぬひりやとまくひま
能伝大納言たりぬくわまくの
ゆうたゆくわさうてくわまくの
きんじとあくわらひきとくわ
やおまくすとあくわらひきとくわ
くわとくわ後とくわのとくわ
このくわは未産地のゆ二ひまの
たうゆすじゆをと后とくわの内報

とす湯明門だけのうからひを寛
治二年正月十六日かゑてよあせたま
ゆく十二月曆正年正月十九日く
升るいわゆる立大抵風
といふはれをねお殿宮の庭やく
中昂位えりせとだらうもせゆ
しらじにせきとくすれくせ
きのりえどじとくれくせ
とまらせりあまるとく
りりと近房中納言まづけ

ひりふせとてひの半入
ふみゆうなとされうなまくろ
中納言とアレ人のひきとく
とく人なりしるあくせのたうがひたらく
ら行うとととととととととととととと
れとくとくとくとくとくとくとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あはりとくとて立候の處
人よりありひきも人の事鄰もと
てうんあるをよそひて中づくへ
か浦をなすはひたが實故にまえ
の出ひましゆくとくとくにた
くはくはくはくはくはくはくはく
んとねじりひらひらまくまく
るのみゆけりきれいのめぐりて
まくゆまくゆまくゆまくゆまく
小錢せりと竹

別民紙叢甘棠詠
莫忘多辛風月遊

とけらせぬうけかんえとれ
せらりりつるゆくの祕くみよふ
のみなまきのやまくりうこう
やまのあひうりうとそ人
のゆゑうてのじうじうふ
ゆゑうてのじうじうふ
はまくみのやまくとくうう
よまくとくうう

せぬまへきりまわりまし
まわらひまくのすみつるゆう
くまきりは方をすめゆうまう
まくまくまくねのたまきまくまく
いりとあくまくまくまくまく
てまくらひとまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく

てきりあつたるはれのとて殿上
はけうさうのゆゑにひきあつてんた
ちあらうかくひきあつてんた
きりうきよなううきのゆゑを
りうとくうたつううてんた
えううやうひうとらあらすの
のゆゑよくううきうをなぐそでけ
きくうううううてんた
あるの陪膳の落方の番うそでけ
はくうそくううううとくうわせと
あううれりうりよじまのとくうひ
よもくたまううてはきれがくうとくう
小なりうううて日こうとくうすら
えくふくふくふくふくふくふくふく
くふくふくふくふくふくふくふくふく
きくふくふくふくふくふくふくふくふく
信膳つううううておもとくでこも
とくうううううううううううう
のとくうううううううううううう
うううううううううううううう

ゆひわくまくらかす南殿
おひそむまうりの小ゆらんとて
ゆりのまくらかすもうりてゆは
ゑうゆくゆうふ近津アシタ
えうねうてゆくふせてのせゆ
てうづうたきくまのまくされそ
ととせゆまくよだかキニ家と
Pまくいキ宿アシタうらゆらくら
えあくまくひる山房とゆる
きゆうえくらのゆうせなうふ山房

あくゆくらゆくらゆくれいゆく
えくゆくせりまくらゆくりゆく
れくらてなゆくれまくらゆく
つまくらゆくらゆくらゆく
えきくらゆくらゆくらゆく
いがくらゆくらゆくらゆく
えくらゆくらゆくらゆく
ゆくらゆくらゆくらゆく

九州大學圖書印



